

「嵐山は京都ですか？」 SNS 時代の認知行動そして人間関係

加藤 敦史 (本学教職研究科准教授、教科教育学)

何年か前にある高校生(京都市内の高校に通学する勉強熱心な高校3年生)から「嵐山は京都ですか」と問われた。私はこの質問に驚き、私の頭は一瞬フリーズしてしまった。嵐山は平安の時代から知られ、その名前は日本全国、海外にも知れ渡る史跡・名勝である。桜、紅葉、雪の季節の便り、コロナ禍の観光客の動向などニュースでは必ず画像と共に取り上げられる。高校生も何度も嵐山には行っているという。では、高校生の質問はどうして発せられたのか。まず考えたのは行政区の質問なのか。嵐山は右京区、西京区にまたがっており、京都市域内である。次に考えたのは、井上章一氏の著書「京都ぎらい」(朝日新書 2015)にあるように、「嵯峨は京都とちがうんやで…」と京都を「洛中」と「洛外」に分け、洛中人による洛外人へのさげすみの京都論を展開している。このことを高校生は言っているのだろうか。これは京都の本性を問うものだ。

しかし、私は最近の若者の認知行動からくるものではないかと考えた。現在は、若者だけではなく老人もスマートフォンを携帯しなければ生きてはいけない時代となっている。スマホはとにかく便利で魔法の杖のようである。LINE、メール、フォト、FB、ネットバンキング、非接触支払い、天候・災害情報、乗り換え、ワクチン接種予約、ネット、ゲーム、カメラ、ワンセグ、動画、GPSの位置情報、そして検索など機能満載で私はついていくことができない。スマホ以前は目的地を見つける場合に地図から現在地と目的地の位置関係、周辺の地域情報をつかんでいた。この場合には我々の空間認知は点から線へ、線から面へと広がることで地域を捉えていた。しかし、スマホにより一気に目的地を探し出すことができるようになり、現代人は森を見ないで、本の木だけを見て行動している。

スマホ時代に必要なのは起点と終点のみで、そのルートの周辺地域には関心はない。東京の小金井市に行くつもりが、着いたのは栃木県下野市であった。

検索で「小金井」を入力したのだが、「小金井駅」は東北本線、目的地の小金井は中央本線の「武蔵小金井駅」であった。同様な誤りは多々ある。

SNSは多様化した現代の人間関係の在り方にも大きな影響を与えている。国内外の多くの人とつながる可能性がSNSで一気に広がった反面、同時にコミュニケーションの困難を感じ、リスクを回避するような表面的で無難な人間関係の適応を目指そうとする傾向があると指摘する専門家もいる。それは互いが深く理解しあつた上で達成される人間関係ではない。多くの人と気軽に自由な関係は自分だけではなく相手も持っているので、自分が相手から選んでももらえないかもしれない不安も生じる。

LINEの登場で電子メールは過去のものとなった現在、コミュニケーション手段として言葉のやり取りは、軽い言葉、短い単語、語彙が豊富な表現力は不必要となる。リアルな人間関係は面倒で、素直に話すことを躊躇させる。(内閣府「平成29年子供・若者白書」より)

教育現場では生徒同士、生徒と教師、教師同士の人間関係の構築が希薄になっているのではないだろうか。学校はクラス、部活など集団から人間力、社会性を育て、学習はそれぞれの教科・領域の教育目標を実行し、文化を育てているが、従来の方法では対応できないかもしれない。

数年前に学部生が地理の模擬授業でスマホのグーグルマップを使い、検索地点に一気にたどり着いた。これを見ていた他の学生は歓声をあげたが、調査地の詳細な様子はわかるが、その調査地がどのような地域(自然環境、社会的環境さらには地理的概念)は全く把握できておらず、誰一人この問題に気づかないままであった。まさに木を見て森を見ず。これでは正しく社会認識ができない。冒頭の高校生はそのことに気付いたからこそ、質問をしたのではないかと私は理解した。